

2019. 9. 22. 聖霊降臨節第16主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書5章33-39節

『新しいことば』

断食という行動があります。文字通り食を断つということですが、ユダヤ教に限らず、古今東西さまざまな宗教において断食は宗教的信仰の行為として行われてきました。聖書の世界でも、断食には長い歴史があります。

断食する理由は多様ですが、一つには罪の悔い改め、ということがありました。神の前で自分の罪を悔い、改めようとして、一定期間、食を断つ。あるいは悲しみのとき、あるいは神に何かを切実に願う、嘆願といったときに、断食はしばしば行われました。やがてユダヤ教の中で、制度として取り入れられ、年に何回、と定められたり、ファリサイ派のような厳格なグループは週に2回、定められた曜日に断食をする、というように広がっていきました。

洗礼者ヨハネのグループ、この人たちは断食を重んじており、ヨハネ自身は断食をしない時も粗食ですごしていたと言われています。

食を断つ、ということには修行という要素が色濃くあります。禁欲的、という要素もあります。事実宗教というのは、何らか禁欲的な傾向が何かしらあって、お坊さんの朝早くからのおつとめといったこと、読経や座禅、食事も菜食、そう少し思いうかべるだけでも、神や仏に向かう人間の姿勢に、ある種修行的な、禁欲的な、断食的な、感覚があるようにも思われます。

先週礼拝で聞いたのは、主イエスがみんなからはじき出されていたレビという徴税人に「わたしに従ってきなさい」と呼びかけ、レビはその呼びかけに応え、従っていたという出来事でした。そのレビがイエスのために盛大な宴会を開き、レビの同業者や、罪人と呼ばれるような人たちがその宴会に集まってきた。宴会はとても賑やかなものだったのでしょう。それを外から見ていたファリサイ派や律法学者は主イエスの弟子たちにつぶやいたのです。「なぜ、あなたたちは徴税人や罪人と一緒に飲んだり食べたりするのか。」

今日の聖書個所の冒頭の人々とは、このファリサイや律法学者たちのことです。彼らは今度は直接主イエスに問いかけるのです。「ヨハネの弟子たちはたびたび断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子

たちは飲んだり食べたりしています。」なんであなたたちは断食しないんですか。端的に言えばそういう質問です。主イエスは、わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである、と言われた。そうするとレビも悔い改めることこそが重要なのだ。ならば悔い改めの思いをあらわし、断食こそがふさわしい。今こそ断食をすべきだろう。この宴会には、徴税人や罪人が集まっているのだから、宴会なんか開いている場合ではない。逆だろう、断食をこそすべきだ。というのが彼らの考え方でした。

主イエスの彼らに対して、「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたにできようか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」と応えられた。譬えでお応えになったということです。短いけれど、意味深いたとえです。婚礼の席で、花婿と一緒にいるのに、客に断食をすすめる、というようなことがあるのか、と問い返しておられるのです。喜びの席で、悲しい顔つきで断食するようすすめる人がいるのか、と問い返しています。この譬えのポイントは今という時をどうとらえるか、ということで、それは花婿と一緒にいる、婚礼の場だ、ということです。花婿とは、言うまでもなくイエス・キリストのことです。イエス・キリストご自身が、今は一緒にいる時じゃないか、といっているのです。そしてそれはユダヤ人にとって、人生最大の喜びのとき、婚礼の席という喜びのとき、何故その時に断食をする必要があるのか、と問い返しているのです。

ファリサイ派、律法学者、そして名前のできた洗礼者ヨハネ、この人たちはいずれも断食を重んじる人たちです。もちろん、それぞれ立場は違いますし、全然違う面もあります。しかし、共通することがありました。それは彼らの信仰が、努力や精進、苦行も含め、何らかの修行的なものを大事にするということです。修行というと大仰な感じがするとすれば、身を律するということと言い換えてもいいかもしれません。洗礼者ヨハネは、このルカ福音書の3章で、「差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」と宣べ伝えた。わたしたち一人一人は神の前でどうしようもない罪人であって、誰もその怒りを免れない。そのことを悔い改めて、身も心も入れかえて、ふさわしい実を結べ、といっているのです。これは明らかに、努力や精進、修行的な信仰の捉え方です。

一方、主イエスが語る信仰は、一言で言えば、喜びに生きる信仰、ということなのです。これはファリサイ派の人々の信仰の方向性とは、根本的に違うものです。

主イエスはここで、わたしたちの現実を花婿と一緒にいる、と語ります。それは婚礼の席という喜びの席で、なんとわたしもそこに招かれています。まさに徴税人レビが招かれたように、こんなわたしも、招かれて喜びを共に分かち合っているのです。確かに、洗礼者ヨハネがとらえるように、わたしたちは神の前でどうしようもない罪人です。しかしだからといってそこで切磋琢磨、身を律し、ふさわしい実を結ぶべく努力を重ねなければ救われない、ということではない。キリストと一緒にいてくださるにおいてもうすでに救われているのです。

そもそもヨハネと主イエスでは同じ「悔い改め」という言葉を使っても、その意味するところは違いました。ヨハネは心を入れかえる、悔いて反省し、心を入れかえ、ふさわしいものになるべく努力する、という意味で悔い改めを語った。しかし主イエスは、「本来の場所に帰る」「立ち帰る」という意味でしばしばこの言葉を使っています。迷子になった一匹の羊が羊飼いに見出され、抱かれて帰る、あれが主イエスの語る悔い改めです。

花婿と一緒にいる、イエス・キリストがわたしたちと共に歩んでくださる、インマヌエルということがわたしたちの本来の場所です。神と共に在ることの恵み、その場所に主イエスによって帰らせていただく。それが悔い改め。羊飼いは誰よりも羊が見出されたことを喜んでくださった。主の喜びの中にある自分を喜ぶ、それが信仰なのです。

花婿が奪い取られる時、それは十字架のとき、ということですが、その時には、彼らは断食することになる。しかし、わたしたちはすでに知っているのです。その断食のときは長くはない。しかもさらに大きな喜びのときが復活の主によって与えられるのです。おそらくこの時点ではファリサイ派も、律法学者も、そしてそばにいた弟子たちも主イエスの語られた言葉の信実がわからなかったであらう。

しかし後になって、弟子たちはこのたとえ話の持っている力、恵み、豊かさをかみしめることになるのです。

主はこの後さらに二つのたとえを語られる。36 節からと 37 節からのたとえですが、おそらくこれは、当時人々の間で知れ渡っていたことわざのようなものだった。それをここに主イエスはあえて付け加えた。古いものにちょっとだけ新しいものを付け加えるということは、確かにあるでしょう。どういう領域においても。ところが根本的に新しいものが出てくると、それは古いものにつぎ足すようなわけにはいかない。古いものをちょこちょこっと手直して、それほんの少しの新しいものを付け加えれば、それ

でいい、というわけにはいかない。

ファリサイ派の修行型の信仰にほんの少し何を足せば主イエスの示された喜びの信仰になるというわけではない。信仰というものの受け取り方が根本的に違うのです。ファリサイ派や律法学者たちは、それがどう違うのかがわからなかった。わからないから修行型の彼らから見れば、主イエスの信仰は、いいかげんなデタラメの信仰にしか見えないのです。主イエスが最後に話された「古い葡萄酒を飲めば、誰も新しいものを欲しがらない」とは言いえて妙で、古いワインを飲んでいけば、新しいワインなど飲む気にならない、つまりファリサイ派は、古い修行型の信仰の枠の中に入って、そこからしかものが見えなくなって、新しいものの新しさがわからなくなっている、ということです。

今日の聖書箇所から、わたしたちが聞くことは、主イエス・キリストが与えてくださる信仰は、喜びの信仰だ、ということです。レビであれ、誰であれ、わたしであれ、罪人であるわたしが主イエスに招かれ、主イエスと共に歩むものとされる、キリストの赦しと恵みと、愛の中に生きる者とされている、すでにわたしたちは婚礼に招かれた客のように大きな、大きな喜びの中にあるのです。そのことを知らされて喜びの信仰を生きていきたいと思います。

D a t a : 聖霊降臨節第16主日礼拝式説教

讃美 : 前514、後194

新生教会礼拝堂